

湖西運動公園内遺跡群第2次発掘調査概報

1976・12

静岡県湖西市教育委員会
湖西文化研究協議会

序

湖西市は静岡県の最西部に位置し、西は弓張山脈、南は太平洋、東は浜名湖と変化に富んだ南北に細長い町です。そして、美しい自然と温暖な気候に恵まれ、「緑と水の都市」湖西は、市制5周年を迎えた若い都市であります。

湖西市は、この「緑と水の都市」にふさわしく、縄文時代より歴代の遺跡が数多く存在しています。特に古窯は、湖西市丘陵地帯だけでも100か所、172基が知られています。これに豊橋市内のものや未発見の古窯、あるいは4～5基で群を構成することを考えれば、古墳時代から奈良時代にかけて、この湖西地域が数百基の窯跡が群集する東海地方有数の窯業地帯であったことが明らかになっています。

これらの古窯や湖西地方の歴史を解明していった昭和32年からの静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部諸君による踏査及び調査、また、遠江考古学研究会や地元湖西文化研究協議会の人達の活動を見のがすことはできません。

今回、湖西市が緑豊かな湖西市の景観をそこなうことなく、市民が「働きやすい、住みやすい」新都市計画を推進し、湖西運動公園の工事をすすめてきました。ところがこの地域に「静岡県埋蔵文化財地名表」に記載されていない新遺跡が発見され、1975年第1次調査を、1976年第2次調査を実施してきました。この発掘調査には、浜松市郷土博物館の向坂鋼二氏、辰己均氏および学芸員の方々、鷺津中学校教諭嶋竹秋氏、湖西文化研究協議会の方々の御指導とご援助があって、はじめて完遂されたのであります。

この度、第2次発掘調査概報を刊行するにあたり、私達の祖先の文化遺産を明らかにすると共に、将来の湖西市埋蔵文化財保護行政の指針とし、また、学術・教育の参考資料として活用されることを願ってやみません。

終りに、この調査に多大の労を煩わした調査員の皆さんやご支援くださいました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後の変りなき指導をお願いする次第であります。

昭和51年12月6日

湖西市教育委員会

教育長 牧野 治平

例

言

1. 本書は湖西運動公園遺跡群の第2次発掘調査に関する調査結果を速報的にまとめたものである。
2. 本文は嶋竹秋が執筆した。
3. 挿図のうち、遺構図は調査補助員の実測により、他の実測図、拓本は嶋竹秋が作成し、それぞれを清書した。
4. 図版写真のうち、出土遺物は浜松市立博物館・漆畑敏氏の撮影によるものである。

目 次

| | | |
|-----|--------------|--------|
| I | 調査に至る経過と目的 | (1) |
| II | 調査の経過 | (2) |
| III | 位置・地形及び歴史的環境 | (3) |
| IV | 遺 構 | (4) |
| | (1) B - 4 地点 | (4) |
| | (2) B - 5 地点 | (6) |
| | (3) B - 6 地点 | (6) |
| V | 出土遺物 | (11) |
| | (1) 弥生時代の遺物 | (11) |
| | (2) 古墳時代の遺物 | (11) |
| | (3) 奈良時代の遺物 | (12) |
| VI | 考 察 | (15) |

挿 図 目 次

| | | |
|--------|----------------|--------|
| 第 1 図 | 湖西運動公園遺跡位置図 | (3) |
| 第 2 図 | 湖西運動公園遺跡地形図 | (5) |
| 第 3 図 | B - 4 地点遺構D実測図 | (7) |
| 第 4 図 | 第 2 住居跡実測図 | (7) |
| 第 5 図 | B - 6 地点地形図 | (8) |
| 第 6 図 | 土器棺出土状態実測図 | (9) |
| 第 7 図 | 土拵状ピット実測図 | (9) |
| 第 8 図 | 第 3 号住居跡実測図 | (10) |
| 第 9 図 | 出土土器拓影 (水神平式) | (13) |
| 第 10 図 | 出土土器実測図 | (14) |

図 版 目 次

| | | |
|--------|---------------------------------|------|
| 図版 I | (A) B-4 地点遺構 D (西から) | (17) |
| | (B) B-5 地点第 2 号住居跡 (西から) | (17) |
| 図版 II | (A) B-6 地点第 3 号住居跡 (東から) | (18) |
| | (B) 第 3 号住居跡かまど | (18) |
| 図版 III | (A) B-6 地点土器棺出土状態 (北から) | (19) |
| | (B) 同上土器棺片 | (19) |
| 図版 IV | (A) 出土須恵器 (上段坏蓋・下段坏身・埴・埴) | (20) |
| | (B) 出土須恵器 (上段坏蓋・下段坏身・高坏) | (20) |
| 図版 V | (A) 出土須恵器 (長頸壺・鉢) | (21) |
| | (B) 土師器甕・陶製紡錘車 | (21) |

湖西運動公園遺跡群第2次発掘調査概報

I 調査に至る経過と目的

1969年度の湖西運動公園造成工事で、丘陵の平坦地や斜面からかなりの須恵器片が採集されたことが、この遺跡発見の端緒となった。

1970年8月、湖西市教育委員会の依頼によって、浜松市立郷土博物館の向坂綱二・辰己均氏らの踏査が行なわれた。この結果、運動公園造成地内には弥生時代の土器棺や古墳が発見された。また、古墳時代および奈良時代の須恵器片がかなり採集されたことにより、それぞれの時代の何んらかの遺構が残存しているのではないかと推定した。そこで、湖西運動公園予定地内の遺跡を「湖西運動公園内遺跡群」と命名し、地形によって地区分けをした。谷間の水田地帯をC地区、水田北側丘陵をA地区、西側丘陵をB地区、南側丘陵をD地区としたのである。踏査結果に基づいて、種々協議したうえで運動公園造成計画に従い、順次年度の工事計画地区を事前に発掘調査を実施することが必要ではないかと考え、第1次調査（1970年12月14日～12月25日）をB地区に限って実施し、すでに概報（嶋1976）を発行した。

第1次調査の結果は次のとおりである。

- (1) 標高45mの丘陵平坦地に位置し、この地方に盛行した窯業となんらかの関係を持った遺跡である。
- (2) 出土遺物は古墳時代後期（Ⅳ期）から始まり、奈良時代が最も多い。遺構も奈良時代のものである。
- (3) 頂部平坦地から、焼土および柱穴が存在しない小形堅穴が発見された。
- (4) 頂部平坦地の南側に急角度で落ち込んで一段低い所にテラス状につくられた平坦地（遺構C）より、不整形の浅い掘り込みが発見された。灰白色粘土ブロックや甕形土器の出土などから作業場（工房址？）と推定した。

上記の結果によって、1976年度の工事予定地内にも遺構が発見される可能性が強まり、湖西市教育委員会が調査主体となり、第2次調査を実施することにした。

6月29日に第2次調査を実施するための打ち合わせ会を湖西市民会館で行なった。湖西市教育委員会から鈴木隆平教育長、担当の関守弘氏、建設課から袴田和男課長・馬場源課長補佐、調査担当側から向坂綱二・辰己均・嶋竹秋、湖西文化研究協議会から会長の彦坂良平氏が出席した。この会合で追加工事も予定されているので7月の中旬に発掘調査に入ること、B-4地点の地形測量は建設課が実施すること、その他発掘方法や調査体制などの問題について協議した。特に第2次調査では、第1次調査のB-1地点の西側一帯と、他の平坦地に重点を置き、来年度工事地点もあわせ調査することによって遺構の検出につとめ、B地点での遺跡の性格を明らかにしようとした。

調査方法は巾3mのトレンチを運動公園造成工事基準線と並行になるようにできるだけ長く設定し、

しかも、トレンチ間隔を7 mとすることにより、いずれかのトレンチから遺構が検出されることを期待した。そして、遺構が検出された場合にはその部分を拡大する方法で調査することにした。それぞれの発掘調査地点を発掘順序に従いB-4・B-5・B-6（来年度工事区）地点に区分けした。

調査体制は浜松市立郷土博物館の向坂鋼二氏を顧問とし、調査主任を嶋竹秋、調査員として浜松市立郷土博物館学芸員諸氏の応援を仰ぐこととした。調査補助員には吉岡伸夫（国学院大学学生）、佐藤由紀男（立正大学学生）の2名をあて、他に県立浜松西高校史学クラブ生徒、湖西市立鷺津中学校郷土研究クラブ生徒諸君の協力を得ることとし、作業員常動10名によって調査をすすめることとした。

II 調査の経過

1976年7月9日～19日

9日午後より発掘地点の現状写真を撮影し、B-4地点のトレンチの設定と表土除去作業を行なう。古墳時代後期の坏蓋、奈良時代の高坏脚部など第3トレンチから多く出土した。第1トレンチ3区から水神平式土器片、および弥生式後期の壺形土器底部が出土した。18日にはB-4地点の表土除去作業と並行して、B-5地点の発掘区を設定する。調査補助員の佐藤由紀男君が調査に参加する。この期間天候が不順で実動6日間であった。

7月21日～24日

台風9号が去ると夏型の気圧配置となり、非常に暑い日が続いた。B-4地点の表土除去作業が完了し、21日よりB-5地点の草刈と表土除去を行なう。第1トレンチ2区より須恵器甕破片と土師器甕破片が出土したが遺構は発見されなかった。第2トレンチ2区より奈良時代の須恵器坏蓋及び焼土が発見され住居跡の可能性が強まった。そこで、第2トレンチ2区を中心に東西に拡張区を設定する。

7月26日～31日

25日は雨天のため発掘作業を中止する。B-4地点では表土下の黄褐色土層を掘り下げる。第3トレンチ1区で丘陵の傾斜面を削り取り南面に平坦地をつくっている遺構が検出された。遺構Dと命名する。この平坦地では奈良時代の須恵器破片多数が発見され、なかでも甕の破片が特に目立った。作業場跡ではなかろうかと推定した。

B-5地点の作業は拡張区の表土除去作業を行ない、住居跡の壁溝が検出された。30日より調査補助員吉岡伸夫君が調査に参加する。B-6地点の草刈と発掘区を設定する。

8月1日～4日

B-5地点の住居跡壁溝の追求をするが、連日の好天で土層の判別ができにくくなったので、湖西文化研究協議会副会長豊田賢治氏のご好意により散水を行なった。このため作業が順調に進み、陶製の紡錘車や3箇所から焼土が発見され、4.2 m × 5.6 mの隈丸長方形のプランになる。第1次調査より数えて第2号住居跡となった。第2号住居跡の写真撮影、平面図および断面図の実測を完了する。

B-4地点の遺構Dの完掘写真の撮影と実測を行なう。

8月5日～9日

B-6地点の表土除去作業に入る。第2トレンチ1区から水神平式の土器棺が横に置かれたような状態で出土した。2区からは土拵状ピットが検出されたが、遺物は発見されなかった。3区からは地盤の赤褐色土層を切る黄褐色土があらわれてきたので、拡張区を設定し表土除去作業を行なう。住居跡の可能性が強まってきた。こうした作業と並行してB-6地点の地形測量と第1トレンチの発掘調査をすすめた。

8月11日～14日

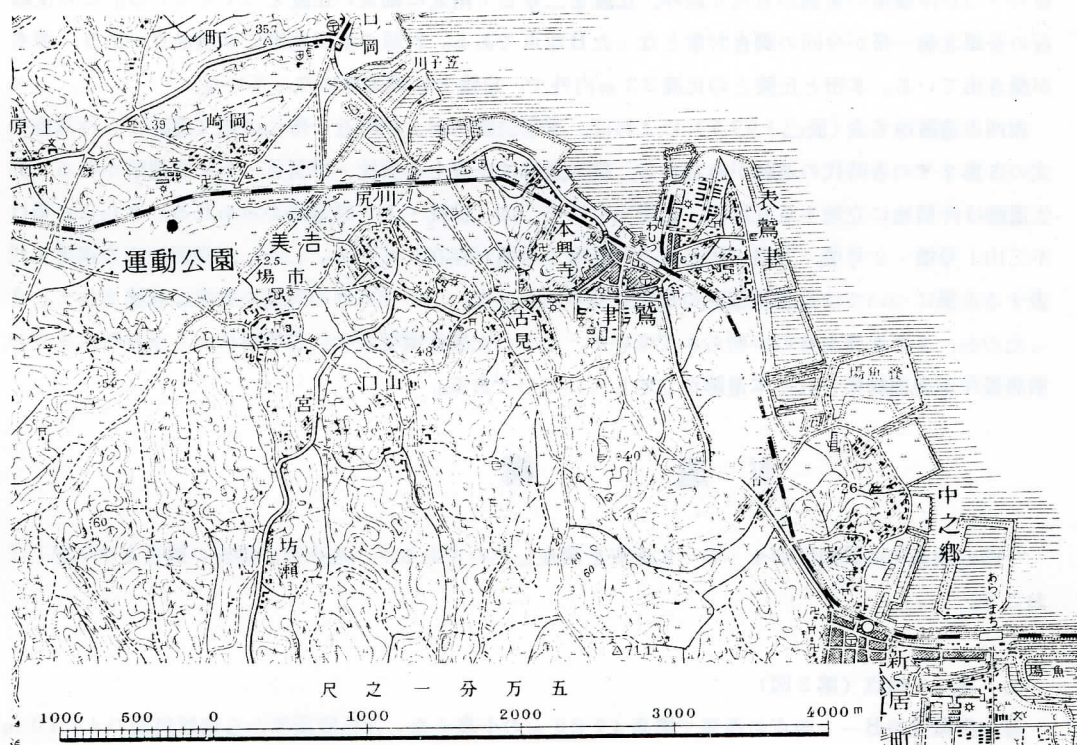
降雨のため10日の作業を中止し、11日よりB-6地点第2トレンチ3区の住居跡プランの確認作業を行なう。調査の進行につれてかまどを持った一辺約4mのほぼ正方形の堅穴住居跡になった。第3号住居跡と命名する。12日には中日新聞遠州版に本遺跡の記事が掲載される。土器棺、土拵状ピットの写真撮影と実測を行なう。13日は第3号住居跡の写真撮影と平面図および断面図の実測を行なう。

予算の関係上、本年度の発掘調査をこれ以上続行することが困難になったので、午後より発掘器材の運搬をした。

14日に第3号住居跡のかまど断面図を作成し、すべての発掘調査を完了した。

延べ日数28日、発掘面積はB-4地点252.5 m^2 ・B-5地点133.5 m^2 ・B-6地点161 m^2 で総面積547 m^2 である。

Ⅲ 位置・地形及び歴史的環境



第1図 湖西運動公園遺跡位置図

東海道本線新所原駅と豊橋駅間の南側には高師原・天伯原・新所原と呼ばれる洪積台地が広がっている。台地の南側は遠州灘に面し、標高75m内外の海蝕崖をなしている。台地はさらに東に延びて、上ノ原・笠子原台地となり、鷲津駅南側付近で高師山と呼ばれる丘陵となる。この高師山丘陵は浜名湖に注ぐ笠子川・一ノ宮川・古見川・横須賀川によって侵蝕され、ほぼ南北に走る細長い丘陵となる。これらの丘陵の東西斜面に古墳時代から中世の行基焼様式にいたる古窯址が約100箇所、172基が知られている。これらの古窯址は第Ⅳ期から奈良時代にかけての時期に増加し全盛期をむかえていたのである。こうした湖西古窯址群は遠江最大の古窯址群であり、東海地方でも有数の窯業地帯であったことが判っている。

現在までに学術調査や開発事業による事前調査で58基の古窯が調査されている(辰己1975)。しかし、これらの発掘調査は古窯そのものか、もしくは前庭部のみに限られており、古窯に関係した工房址や集落址は必ずしも明らかにされていないのである。

今回の調査対象となった湖西運動公園内遺跡群は、この湖西古窯址群のほぼ中央に位置している。地籍でいえば湖西市岡崎上ノ原79に所在している。

東海道本線鷲津駅から西進すると、沖積地の条里制遺構が残存する水田地帯を通過してほどなく湖西市岡崎部落に達する。この岡崎部落の南側丘陵一帯が本遺跡の存在する地点である。丘陵は標高45m内外で、頂部は西側の上ノ原台地から続いているのでかなり平坦である。丘陵東端は笠子川の形成する沖積地に接して終る所で小さな侵蝕谷が形成され、屈曲の多い地形を呈している。こうした侵蝕谷の一つが沖積地の東側から入り込み、丘陵を二分して南北に細長い丘陵をつくっている。この侵蝕谷の谷頭北側一帯が今回の調査対象となったB地点である。谷頭の水田地帯には湧水点があり、清水が湧き出ている。水田と丘陵との比高23m内外で、丘陵上は雑木林になっている。

湖西市遺跡地名表(辰己1975)によれば、運動公園内および附近一帯には縄文遺跡から行基焼様式の古窯までの各時代の遺跡がみられる。縄文遺跡は丘陵上に横枕・伊賀谷・上ノ原遺跡がある。弥生遺跡は沖積地に立地する五反田・丘陵上には不二山・横枕・上ノ原遺跡がみられる。さらに古墳は不二山1号墳・2号墳、方墳と思われるお経塚1号墳が存在している。しかし、湖西地方の遺跡を代表する古窯については行基焼様式の古窯以外みあたらない。すでに他の時期の古窯は破壊されてしまったのか、まだ未発見なのか明らかでないが、こうした歴史環境の中に古墳時代から奈良時代までの須恵器片が表面採集される本遺跡が立地しているのである。

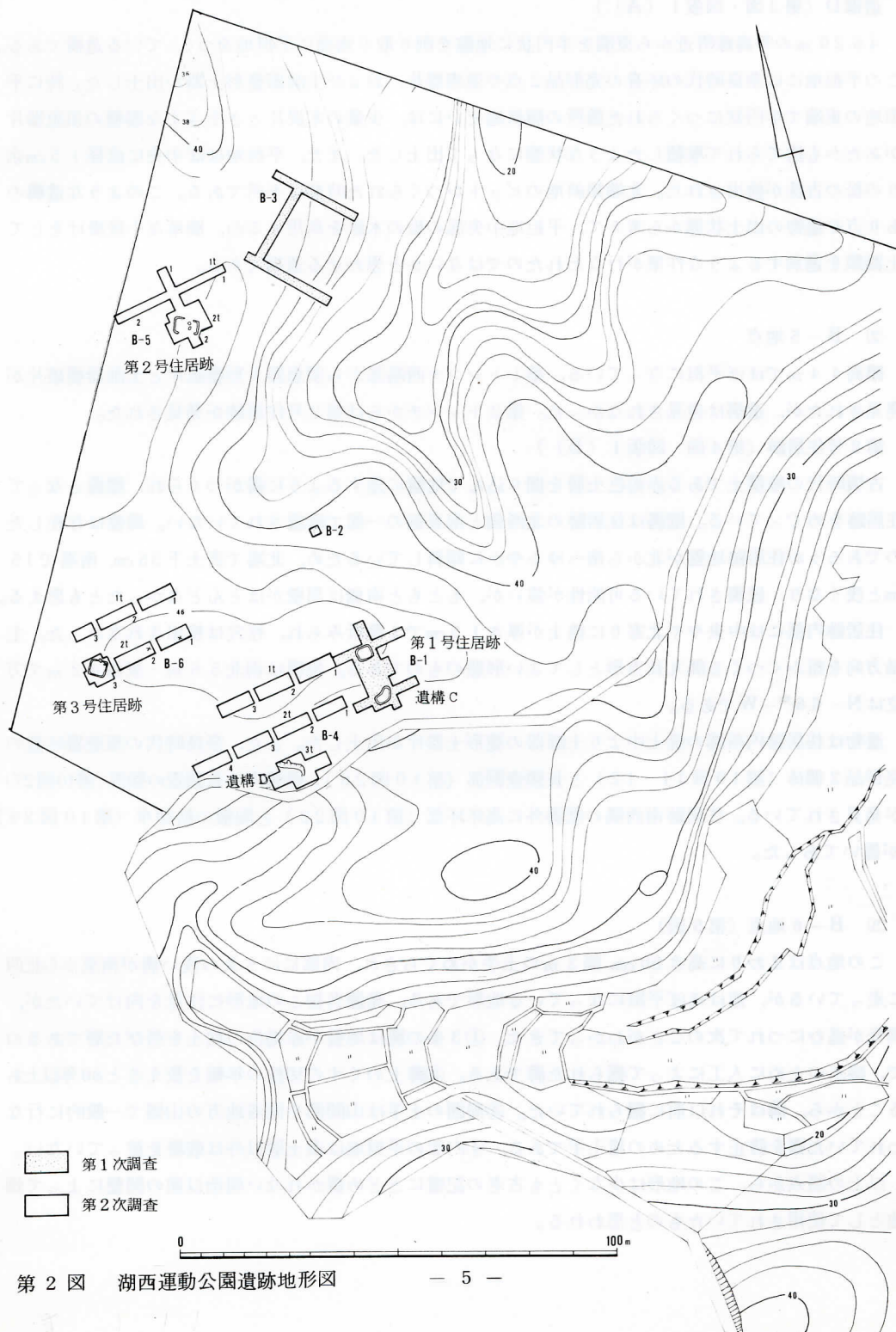
Ⅳ 遺 構

今回の調査ではB地区の4・5・6地点を調査したのであるが、地点別に調査の概要を次に記しておこう。

(1) B-4地点(第2図)

第1次調査のB-1地点の西側で標高47.20mの小高くなった丘陵頂部から南傾斜面の44.40mの間を調査した。断面観察によれば、第1トレンチ・第2トレンチとも頂部に近い所では表土下20〜

30 cmで赤褐色の礫まじりの地盤に達するが、傾斜地では表土下の黄褐色土層が50~60 cmの厚さで堆積している。表土層およびこの黄褐色土層から若干の土器片が出土したが遺構は発見されなかった。



第3トレンチから丘陵の傾斜面を削り取り、南側に平坦地をつくった遺構が検出された。これを遺構Dと略称する。

遺構D（第3図・図版1（A））

46.20 mの等高線附近から東端を半円状に地盤を削り取り南面に平坦地をつくっている遺構である。この平坦地には奈良時代の坏身の完形品2点や須恵器片、および土師器甕形土器が出土した。特に平坦地の東端で半円状につくられた箇所傾斜地ぞいには、少量の木炭片とさまざまな器種の須恵器片があたかも捨てられて堆積したような状態になって出土した。また、平坦地ほぼ中央に直径15 cm余りの松の古株が検出された。北端傾斜地のピットがつくられた時期は不明である。このような遺構のあり方や遺物の出土状態から考えて、平坦地中央部の松の木影を利用するか、簡単な小屋掛けをして土器類を選別するような作業が行なわれたのではないかと思わせる遺構である。

(2) B-5地点

標高44 mでほぼ平坦になっている。第1トレンチ西端部から須恵器大形甕破片と土師器甕破片が発見されたが、遺構は発見されなかった。第2トレンチからは第2号住居跡が発見された。

第2号住居跡（第4図・図版1（B））

古墳時代の堆積土である赤褐色土層を掘り込んで地盤に達するように溝がつくられ、壁溝となって住居跡をめぐっている。壁溝は住居跡の北西側と南東側の一部で確認されていない。周壁は存在したのであろうが住居跡地盤が北から南へゆるやかに傾斜しているため、北端で表土下35 cm、南端で15 cmと浅くなり、破壊されている可能性が強いが、もともと南側は周壁がほとんどなかったとも思える。

住居跡内部には中央やや北寄りに焼土が厚さ15 cmで3箇所みられ、柱穴は検出されなかった。主軸方向を短かくつくる隅丸長方形としてよい形態のものである。規模は南北5.6 m・東西4.2 mで方位はN-66°-Wである。

遺物は住居跡内西端の焼土中より土師器の甕形土器片が出土した。また、奈良時代の須恵器坏蓋の完形品2個体（第10図11・12）と長頸壺胴部（第10図28）、壁溝内に長頸壺の頸部（第10図27）が発見されている。住居跡南西隅の壁溝外に高坏坏部（第10図22）と陶製の紡錘車（第10図29）が置いてあった。

(3) B-6地点（第5図）

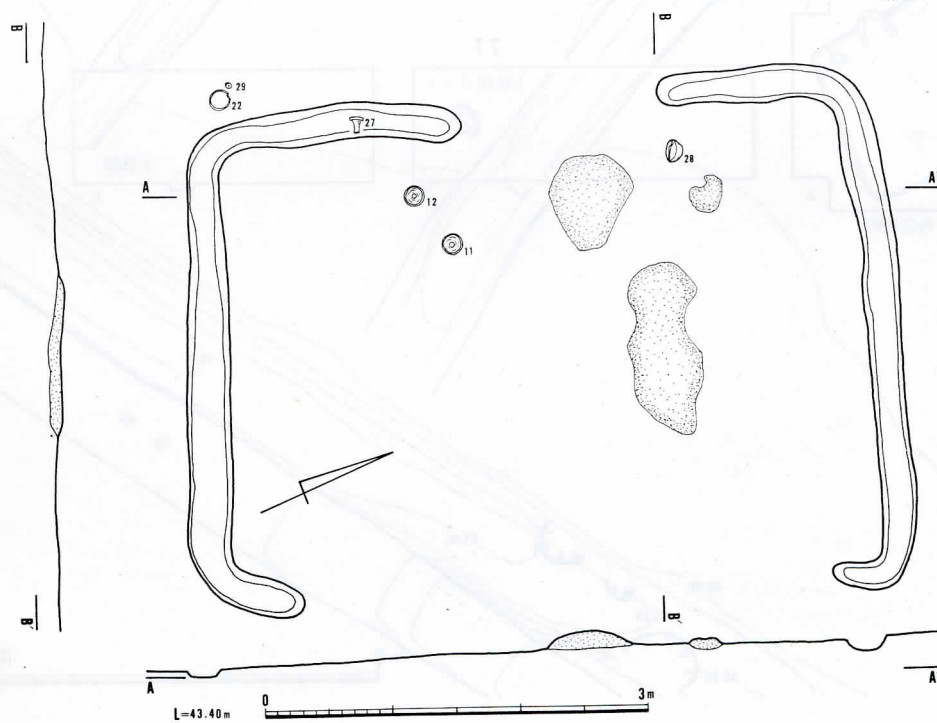
この地点はまわりに高さ80 cm、幅3 mの土手がめぐらされ、内部には3条の浅い溝が南東から北西に走っているが、他はほぼ平坦になっている地形である。発掘当初この地形に注意を向けていたが、調査が進むにつれて次のことがわかってきた。①3条の溝は地盤が赤褐色の粘土を帯びた層であるので、排水のために人工によって掘られた溝である。②溝上のくすの切株の年輪を数えると80年以上あることから、溝はそれ以前に掘られていた。③周囲の土手は山間部や湖西地方の山畑で一般的に行なわれていた猪を防止するための猪土手である。④内部の平坦地は表土層以外は破壊を被っていない。

以上の諸点から、この地形は少なくとも古老の記憶にとどめ置かれぬ明治以前の開墾によって畑地として使用されていたものと思われる。

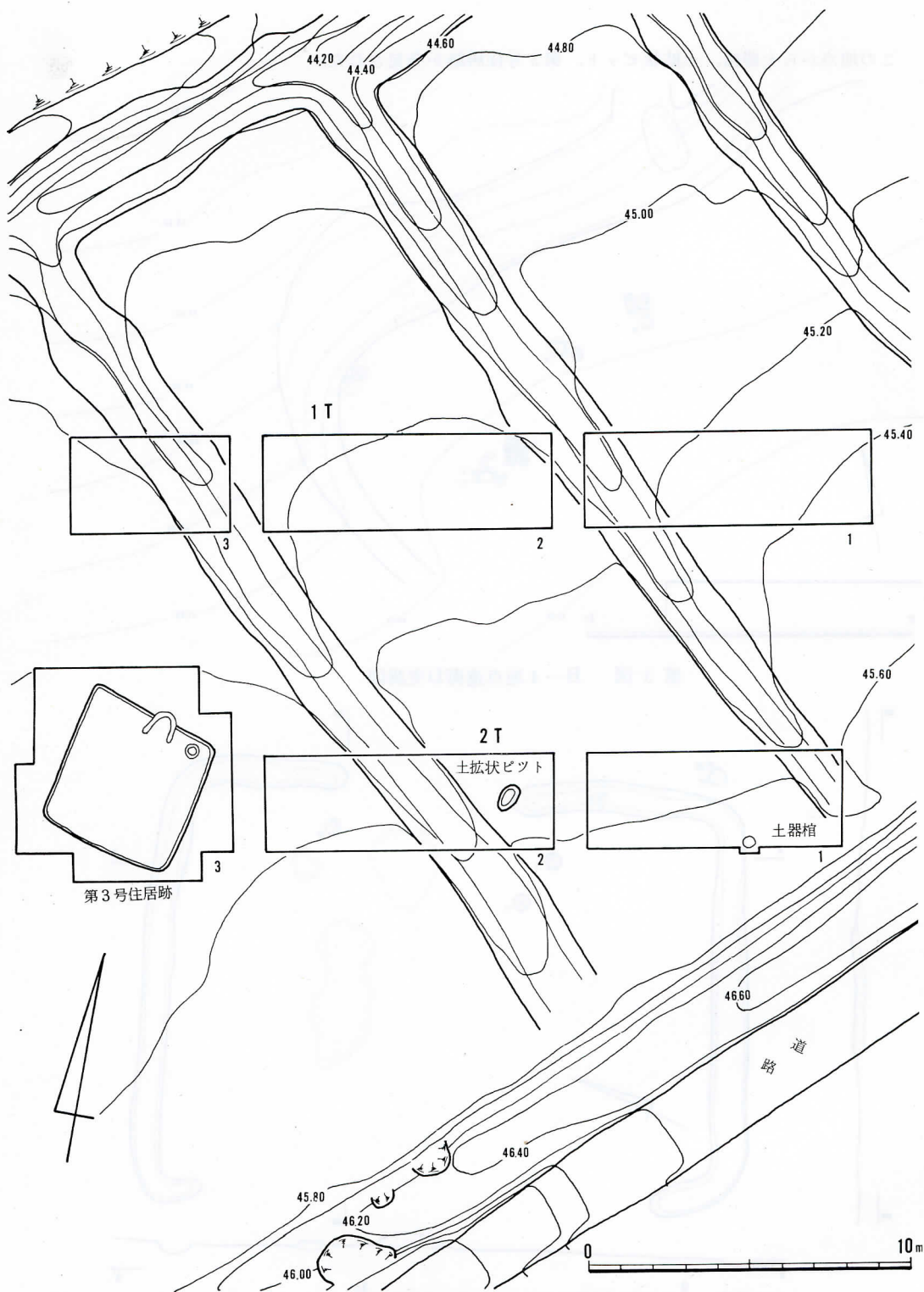
この地点から土器棺，土坑状ピット，第3号住居跡が発見された。



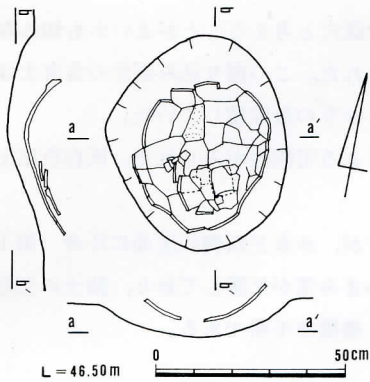
第3図 B-4地点遺構D実測図



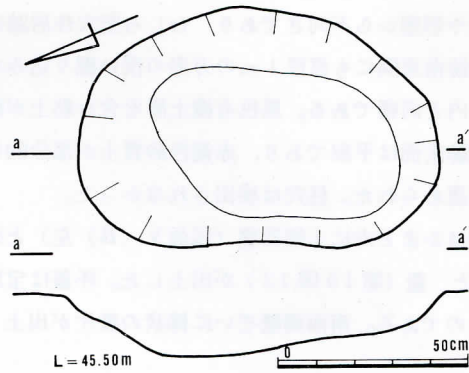
第4図 第2号住居跡実測図



第 5 図 B-6 地点地形図



第6図 土器棺出土状態実測図



第7図 土抔状ピット実測図

土器棺（第6図，図版Ⅲ）

第2トレンチ1区南壁寄りで、表土下25cmの浅い部分から発見された。土器棺本体となる壺形土器は底部と胴部の下半部がかなり良く保存されて、横に置かれた状態の出土であった。棺本体の壺形土器以外に、多く数えて3個体、少なくとも2個体分の土器片が認められる。

まず、棺本体である大形の壺形土器（第9図1）は、底部を北側に向け、地盤を若干掘りくぼめて横に安置している。その上部に木葉痕のある鉢形土器底部破片がひと塊りとなって出土し、さらに、実測図には図示できなかったが、最上部に壺形土器破片（第9図3・4）が発見されている。また、鉢形土器口縁部破片（第9図2）も出土している。これが鉢形土器底部破片と同一個体であるかどうかは、口縁部と底部を比較するのでむづかしいが、同一個体であるかも知れぬ。

このように棺本体の壺形土器以外に2〜3の土器破片が使用されているのは、大形壺形土器の口縁部などを塞ぐために他の土器片を使用したのではないと思われる。壺形土器の内部には黄褐色土が充満するだけで、遺物の発見はなかった。

B-4地点第1トレンチ3区より、土器棺最上部より発見された壺形土器破片（第9図3・4）と同一個体と思われる破片が出土しているが、何んらかの理由で移動したものと考えられる。また、同時期の薄手の鉢形土器破片が3点出土しているので、この地点にも土器棺があったかも知れない。

土抔状ピット（第7図）

第2トレンチ2区より基盤である赤褐色土層を掘り込んだ土抔状ピットが検出されている。南北95cm、東西60cm、深さ15cmの卵形を呈し、ピット内には黒色有機土層と黄褐色土層が混在していた。遺物・骨片など発見されなかったので、時期は不明である。

第3号住居跡（第8図・図版Ⅱ）

第2トレンチ3区より検出されたものである。この住居跡は周壁を完存し、40cmほど地盤の赤褐色土層を深く掘り込んでいた。北辺の中央部にかまどが付設されており、堅穴の隅丸方形としてよい形態である。規模は東西・南北の中央部で4.5mである。方位はN-18°-Wである。

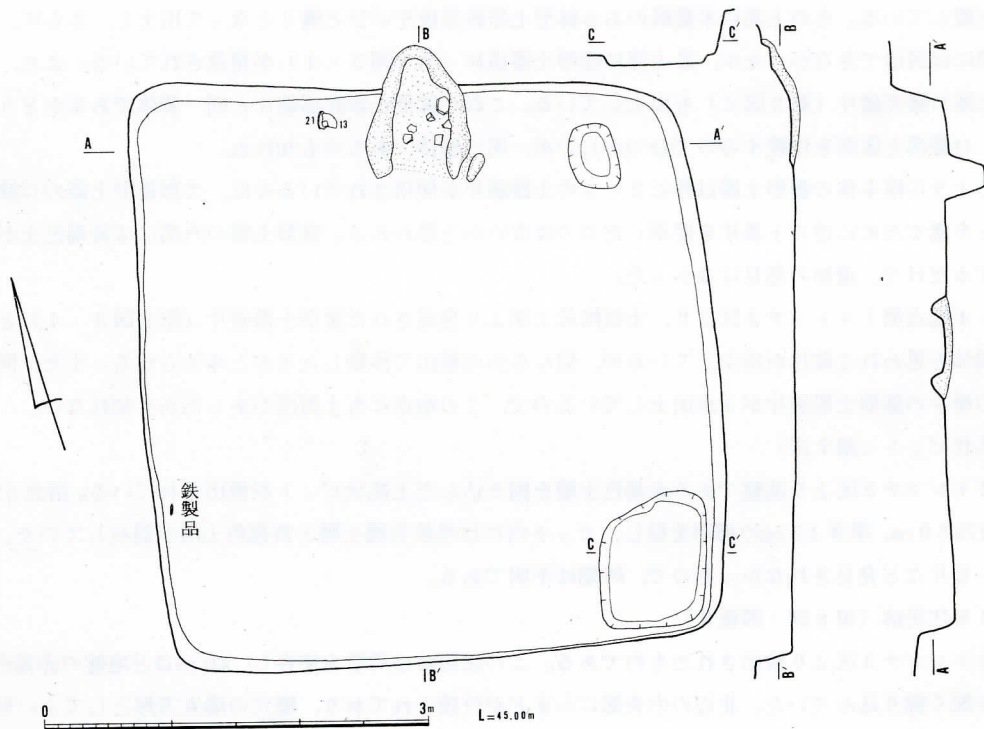
住居跡内部には、かまどの東側に38×55cm・深さ30cmの円形ピットが発見された。内部には黄褐色土と灰白色粘土粒と多量の炭化物が混入し、須恵器片が若干出土した。このピットは柱穴として

は位置や形態から不向きであり、むしろ堅穴住居跡に多い貯蔵穴と考えることがよいかも知れない。

住居跡南東隅にも直径1 mの方形の浅い掘り込みが発見された。この掘り込み部分の含有土は上記ピット内と同様である。黒色有機土層を含む粘土が底面にかなりの量堆積していた。

住居跡床面は平坦であり、赤褐色砂質土が部分的に張ってある可能性がみられた。灰白色粘土も部分的に認められた。柱穴は検出されなかった。

遺物はかまど内に土師器甕(図版V(B)左)と須恵器片が、かまど西側の床面に坏身(第10図21)と蓋(第10図13)が出土した。坏蓋は宝珠状のつまみ部が欠落しており、胎土に気泡が入ったものである。南西周壁ぞいに棒状の鉄片が出土したが、種類は不明である。



第8図 第3号住居跡実測図

V 出土遺物

第2次調査によって得た遺物は、弥生時代・古墳時代・奈良時代の3時代にわたり、整理箱にして4箱分の資料を得た。そのうち、大部分は奈良時代の土器で、次に古墳時代であり、弥生時代は少量で土器棺に使用された土器片と、後期の土器片のみである。

現在整理中であるが、それらのうち主なものを第9図と第10図に図示した。

(1) 弥生時代の遺物 (第9図1~4)

B-6地点から出土した土器で、埋葬の際棺として用いられたものである。器面全体に粗い条痕を施した所謂条痕文土器である。壺形土器と鉢形土器の二種類がある。

壺形土器(第9図1・3・4)1は棺本体となる大形破片の一部であるが、胴部は繊細な縦位の羽状条痕によって調整せられている。3・4は同一個体の頸部破片である。太く粗い条痕が単一方向に左から右に傾斜しているが、頸部から肩部にかけて2段の横走する条痕帯が施されている。その横位条痕帯をへら状器具による2条の沈線で、弧状に同方向から区切っている。胎土には石英を含み、赤褐色の色調で硬く焼きしまっている。器壁が厚い所に特色がみられる。

鉢形土器(第9図2)口縁部は強く外反し、器面に繊細な条痕が斜めに施されている。口唇部に磨滅のため判然としないが棒状器具かなにかで、押引文を施し、口縁部内面には櫛状具による連続弧文が施されている。2の口縁部と同一個体かどうかには決定しがたいが木葉痕がある底部破片が出土している。他に、壺形土器3・4と同一個体の破片や、薄手の鉢形土器片も発見されている。

これらの土器群は水神平式に相当するものといえよう。鉢形土器2は口縁部内面に櫛状具による連続弧文が施され、条痕が繊細であることから水神平Ⅲ式の特長がみられる(紅村1963)。壺形土器1も条痕が繊細で同様な時期に比定されよう。壺形土器3・4は器面に粗く太い条痕が施され、器壁が厚い所から水神平式Ⅱ式の範ちゅうを抜き出していない。したがって、土器棺に使用された土器群を水神平式Ⅱ式からⅢ式への過渡的な時期と考えておきたい。

その他、弥生時代後期の壺形土器底部破片がある。

(2) 古墳時代の遺物 (第10図5~10)

須恵器坏身の最大径が10cm~11cmと小型化された時期のもので、表面採集品とB-4地点遺構Dから出土したものが多し。

坏蓋(5~7・10)口縁部内側に身受けのつくりを有するもので、最大口径10cm、器高2.6cm~3.3cmのものである。頂部はへらで切って整形されたもの(5・6)があり、そこに四本の沈線を刻んだもの(6)もある。

擬宝珠状のつまみがあり、口縁部内側に身受を有する大形な蓋(10)がある。口径16cm・器高3.5cmである。

坏身(8・9)やや半球状を呈し、口径10~11cm、器高3.5cm~4.5cmを測る。口唇部のつくり

はやや内曲するものと、そうでないものがある。底部をへらで整形してある。器面に一条の沈線が施されているもの(9)もある。

甗(23) 表面採集品である。頸部および口縁部と高台を欠いて全形を知ることができない。肩部は丸味を帯び、胴部に櫛による列点文が付せられている。肩部に粘土で肥厚させた注口部が存する。

これらの土器群は、遠江須恵器編年第Ⅳ期(遠考研1966)にあたるもので、孝徳天皇長柄豊碓宮造営にかかわる整地層から検出されたものと同型であり、645年をあまり下らない7世紀中葉にあたるものとされている(伊場月報1972)。

坏蓋10は口径が大きくて、組み合わせに不明な点がある。**甗(23)**も表面採集品で伴出土器が明らかでないが、形態上ここに位置づけておいた。

(3) 奈良時代の遺物(第10図11～22・24～29)

出土遺物の大半がこの時期のものであり、土師器甕形土器をのぞいてすべてが須恵器である。

坏蓋(11～14) 扁平な宝珠状つまみと、同様な円形状のつまみを付けた蓋で、つまみ部から口縁部にかけてゆるやかな曲線を描き口縁を下向きに屈折したもの(12・13)と、折込むように屈折させたもの(11・14)がある。口径15.2cm～17cm, 器高3.5cm～4.2cmである。

坏身(15～21) 器形から4つに分類できる。

A類 扁平な坏で平底に高台を付けるが、底部が高台よりはみ出る丸味のある底になる。そして、胴部が鋭角に屈折し外反して口縁に至るものである(15～18)。口径は13.8cm～14.8cm, 器高3.6cm～4.2cmである。

B類 平底に高台を付け、底部が高台よりはみ出ないものである。器形はA類と同様であり、胴部の屈折部が丸味をおびている(19)。口径17.4cm, 器高4.3cm。

C類 へら切りされた丸底の半球形状をなす器形で、器面の内外にろくろ形成のらせん状指痕が顕著にのこっている(21)。口径14cm, 器高5.2cm。

D類 基本的にはC類と同型であるが、へら切りされた底面が大きくなり、口縁部を外反させ、丸味のある口唇にしている(20)。口径13.3cm, 器高4cm。

高(22) 完存した高坏は出土せず、図示できたのは坏部のみである。胴部は半球形状をなす器形で深い坏である。胴部に沈線が一条施される。口径15cm, 深さ4.8cm。

鉢(24・26) 24は平底に高台がつき、やや内彎しながら口縁部にいたる器形で、器面にノタ目を残さない。26はほぼ半球状の器形で口縁部を外へ屈曲させ、複合口縁を思わせるものである。底部をへら切りし整形している。器面にノタ目を残している。

短頸埴(25) 口縁部を短かく直立させたもので、口径6.5cm, 器高7.2cmである。

長頸壺(27・28) 頸部破片と底部破片がほとんどで完形品はない。全形が知れるものとして、27の頸部と28の胴部を図示した。胴部下端の高台が欠落し、粘土塊が付着している。

陶製紡錘車(29) 陶製の紡錘車としては遠州地方で2例目の発見である。直径4cmの円形で断面は台形を呈し、中心部に0.5cmの孔を穿つ。側面にはたたきをしてから、へらで削り取った痕跡が残る。重量40gである。

その他、須恵器甕形土器があるが、復元できるものはない。

土師器甕形土器 破片は相当多いが復元できるものはない。図版V(B)左の甕のように小形のもの、大形で口縁が「く」の字状に外反し、口唇部をへらで面取りした丸底のもの二種類がある。

以上が奈良時代の須恵器と土師器の概要である。これら須恵器群は遠江須恵器編年第V期に相当するものであるが、伊場遺跡大溝の調査成果(伊場月報2・5)によって、さらに前半と後半に細分できそうである。

まず、坏身のA類~D類の関係であるが、基本的に平底に高台を付けるB類の系統が続くが、それにこの地方の地域的特色であるA類が加わる。そして、A類とC類が共伴関係になっている。D類は後出し、奈良時代末期まで存続するようである。このようなことから、次のように細分できよう。

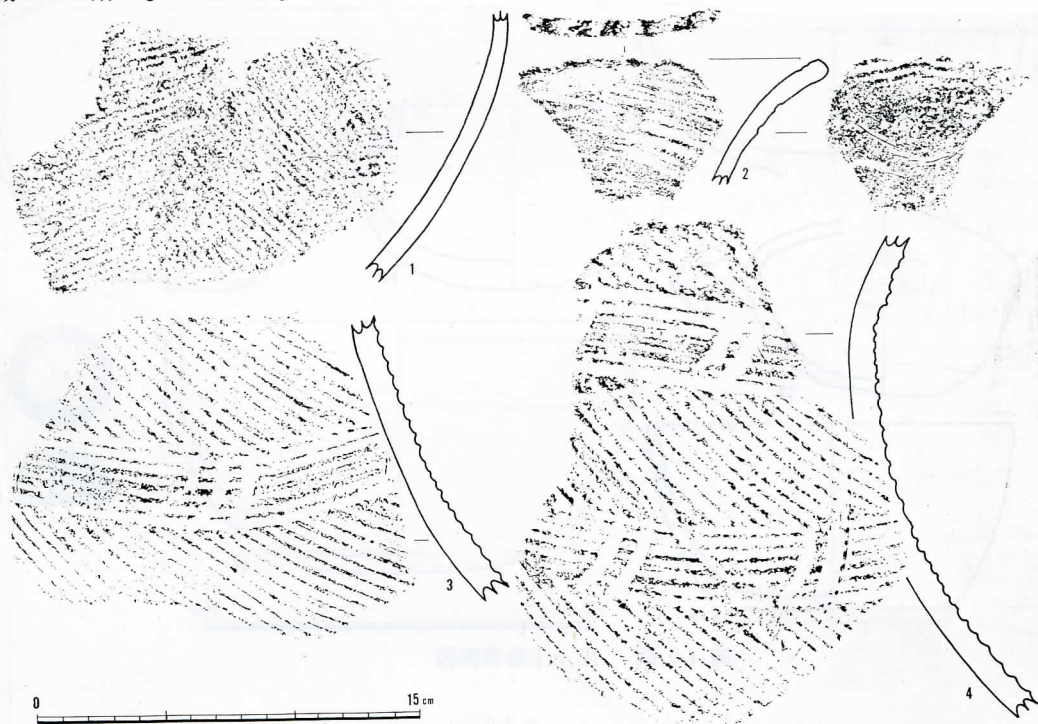
前半

平底に高台を付ける坏身A類と、へら切りされた丸底の坏身C類がこの期のものである。坏身A類と坏蓋がセットになるらしい。他に短頸埴、鉢(24・26)がこれに加わると思われる。

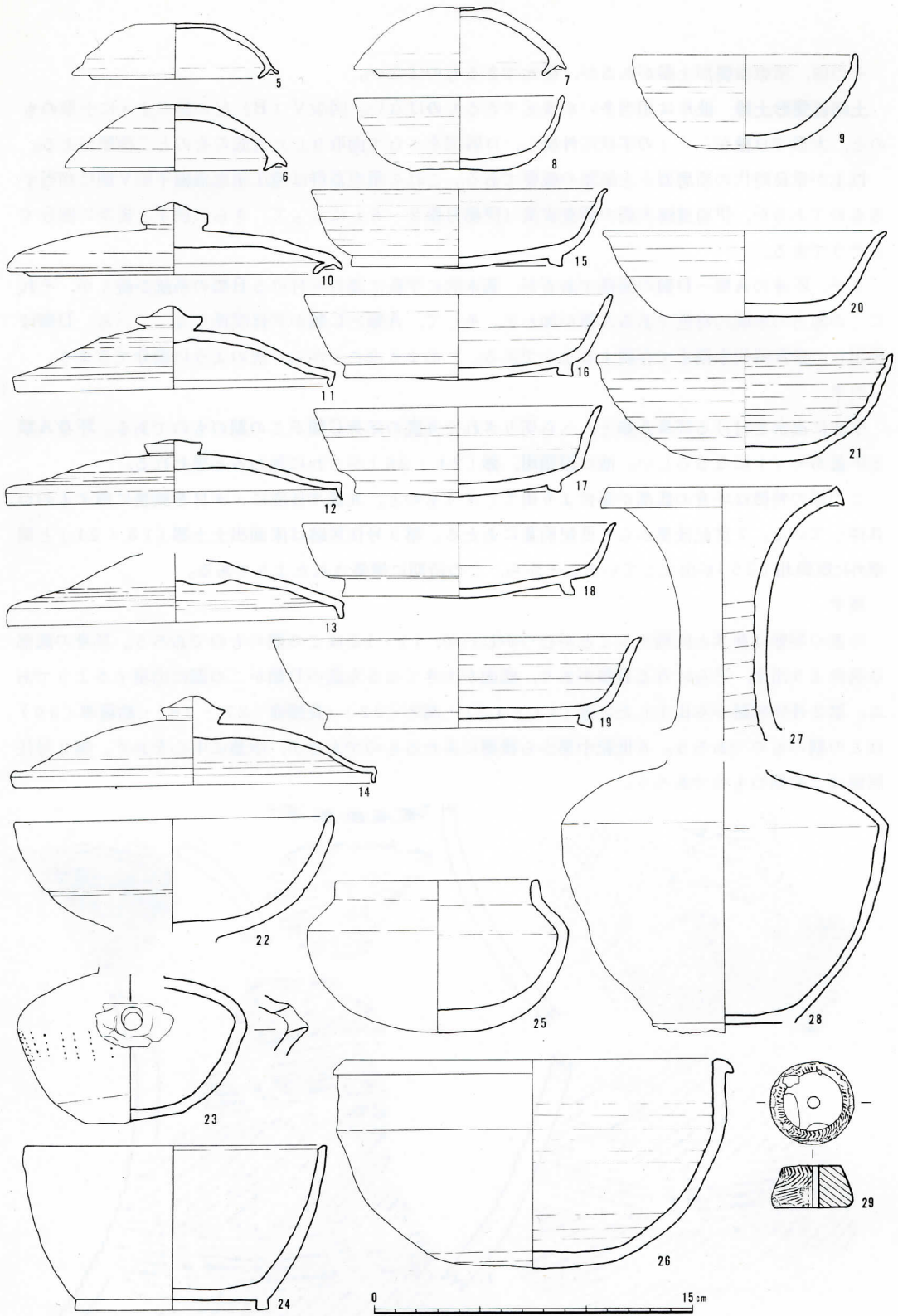
この期の特徴は坏身の底部が高台より出てしまうものと、丸底で体部にノタ目を顕著に残すものが共伴している。7世紀後葉から8世紀前葉にあたる。第3号住居跡は床面出土土器(13・21)と周壁外に短頸埴(25)が出土していることから、この時期に構築されたようである。

後半

坏蓋の形態は前半と区別することがむづかしいが、11・12はこの期のものであろう。坏身の底部は高台より出ず、平らになるB類があり、底面が大きくなる丸底のD類がこの期に出現するようである。第2号住居跡から出土した坏蓋(11・12)・高坏(22)・長頸壺(27・28)・紡錘車(29)はこの期のものであろう。8世紀中葉から後葉にあたるものであるが、中葉に中心をおく。第2号住居跡はこの期のものであろう。



第9図 出土土器拓影(水神平式)



第 10 图 出土土器实测图

VI 考 察

今回の調査により水神平式の土器棺、奈良時代前半の第3号住居跡1軒分と作業場、奈良時代後半の第2号住居跡1軒分が検出された。第1次調査分をあわせると住居跡3軒と作業場（工房址？）2箇所となったのである。

第1次発掘調査の実施する時点で、丘陵の平担部や傾斜面に奈良時代の須恵器片が散布している意味は、まったく霧につつまれているような状態であった。ところが、今回の調査により、窯業に関する集落址であるということが明らかになったことは、大きな収穫であった。以下、本遺跡に関する二・三の問題について述べておこう。

第1に水神平式土器棺の発見があげられる。これは、すでに調査されている湖西市伊賀谷遺跡（向坂1968）の例に類似している。伊賀谷遺跡では、丘陵頂部の平担地と斜面から2つの土器棺が発見されて、墓地であったことが明らかにされている。本遺跡の場合も水神平Ⅱ式からⅢ式への過渡期の土器棺が発見されていることから、侵蝕谷を西側へひとつ越した伊賀谷遺跡と一連した遺跡と把握することができる。

また、型式論的にみて、この種の土器は一応水神平式Ⅲ式の範疇に入るであろうが、従来のⅢ式とはやや趣を異にしている。この点向坂氏は、水神平式には、①遠賀川式を伴出する群、②朝日式の古い部分に併行する群＝大池式相当、③朝日式の新しい部分に併行する続水神平式（水神平Ⅱ式）という三段階を想定している。そして、遠江では、水神平Ⅱ式とはやや異なり、続水神平式（Ⅲ式）とも違った土器群が存在し、これが前記の②に相当する可能性が強いと考えている（向坂1967）。

こうした条痕文土器の研究は、遠江における縄文文化から弥生文化への移行に関する問題に直接結びつくことであるが、今後の課題としておきたい。

第2に、住居跡と作業場などの集落址としての遺構が発見されていることである。

まず、住居跡である。第1次調査で丘陵頂部平担地から検出され、遺構Aと呼んだ胴張りの隅丸方形をした堅穴遺構がある。それを第1号住居跡と呼ぶ。南北3.7 m、東西3.9 mで奈良時代前半の時期のものである。この住居跡は焼土や柱穴となるべきピットが検出されず、しかも、小形であることから日常生活をするための住居跡とは考えられず、簡単な小屋掛けした季節的、あるいは一時的な作業場として使用したのではないかと推定した。

次に今回発見された第2号住居跡は、周壁が不明確であるが主軸方向がややせばまった隅丸長方形のものであった。奈良時代後半の時期のものである。第1号住居跡と同様、かまどや柱穴跡を持っていないが、床面に焼土、壁溝外から紡錘車が検出されていることから、この場合常住の住居跡と考えてよからう。

第3号住居跡はほぼ完存した形で発見された。北辺にかまどを持つ隅丸方形の堅穴住居跡であり、奈良時代前半の時期のものである。かまどは堅く焼きしまっていることから、常時ここを生活の場としていたと思われる。住居跡床面から不明の鉄製品が出土していること。また、第2号・第3号住居跡とも須恵器生産地でありながら、焼土およびかまど内から土師器の甕が出土し、これらが煮沸用の

みに用いられていたことなどが注目される。

以上の第2・3号住居跡は柱穴が発見されていないのである。周辺の遺跡の場合、どうであろうか。静岡県西部地方の奈良時代住居跡の発掘調査例は少なく、浜松市神明平遺跡（大崎1968）がその例となる。この遺跡では第1号住居跡、第2号住居跡が検出されている。第1号住居跡は 3×3.5 mの隅丸方形の堅穴でかまどと柱穴を持っていない。第2号住居跡は 3.75×4.15 mの隅丸方形でかまどを持つが、柱穴は検出されていない。2例とも本遺跡と同様柱穴が存在しないのである。柱穴がない場合に上屋の構造が問題になるが、後考を待つよりほかはない。

住居跡の他に作業場（工房址?）と思われる遺構が2箇所検出されているのも本遺跡の特徴である。

第1次調査で下部平坦地から検出された作業場は、意識的に作成されたプランではないが、その堅穴の中より精製された灰白色粘土のブロックや、須恵器大形甕形土器2個体の破片が出土したことなどにより、作陶のための簡単な作業場として使用したのではないかと推定した。

今回の遺構Dの作業場はそれと異なって、地盤の傾斜面を半円形に削り取って南面に平坦地をつくり、そこで生産された製品を選別したような作業場であった。

上述したように奈良時代前半の遺構が遺跡南部より出土し、しかもそれらが第3号住居跡、第1号住居跡とした小屋、2つの作業場というような構成のあり方は、集落の性格を決定するうえにきわめて重要な示唆を与えている。すなわち、第3号住居跡に住み、住居跡の近くで須恵器生産の作陶や、製品を選別する作業が行なわれていたであろうことは、本遺跡が須恵器生産に関わる集落址ではなかったかと判断したいところである。だが、まだ湖西運動公園内遺跡群のB地点近くで奈良時代の窯跡が発見されていない。須恵器の製作地点と古窯との位置関係、窯出し後の失敗作のステ場への投棄以後の第2次製品選別の必要性など、まだまだ不明の点が多い。

なお、集落址の中心部は第3号住居跡の西側運動公園造成区域外に想定している。

最後になったけれども、調査期間中、湖西市教育委員会教育長、鈴木隆平氏をはじめ、担当の関守弘氏、湖西文化研究協議会会長の彦坂良平・副会長の豊田賢治・事務局長の井上佳男・監事の夏目武男・菅沼幸夫の諸氏に種々の便宜をはかっていただいた。また、浜松市立郷土博物館 向坂鋼二・辰巳均・佐野一夫の諸氏にご指導と援助をいただき、湖西市立鷺津中学校郷土研究クラブの諸君に土器整理を手伝っていただいた。ここに記して感謝の意を表わしたい。

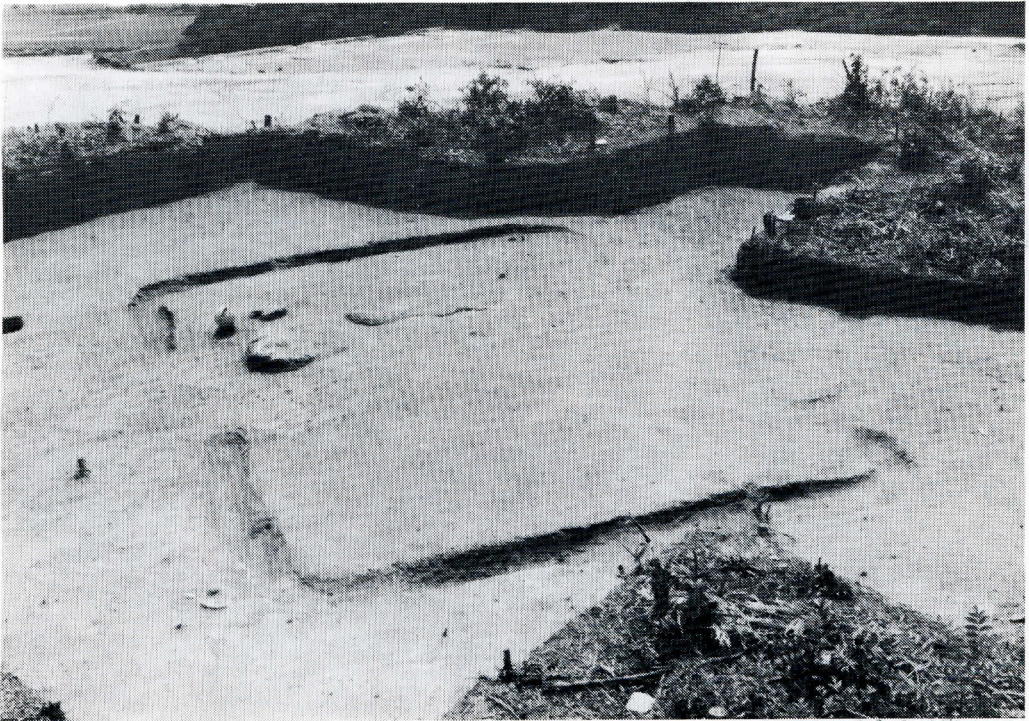
参 考 文 献

- 伊場月報 1971～72 『第4次調査日報』1～6
大崎辰夫 1968 「浜松市神明平遺跡発掘調査報告」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告』
紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡綜括篇』
嶋 竹秋 1976 『湖西運動公園内遺跡群発掘調査概報』
遠江考古学研究会編 1966 『大沢・川尻古窯調査報告書』
向坂鋼二他 1971 『伊場遺跡第3次発掘調査概報』 1975『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』
辰巳 均 1975「遺跡の環境」『早稲川古窯跡』
向坂鋼二 1968 「伊賀谷遺跡の成果」『湖西の文化』12号
向坂鋼二 1967 「遠江地方を中心とした櫛描文と縄文との系譜」雑誌『信濃』第19巻第1号

図版 I

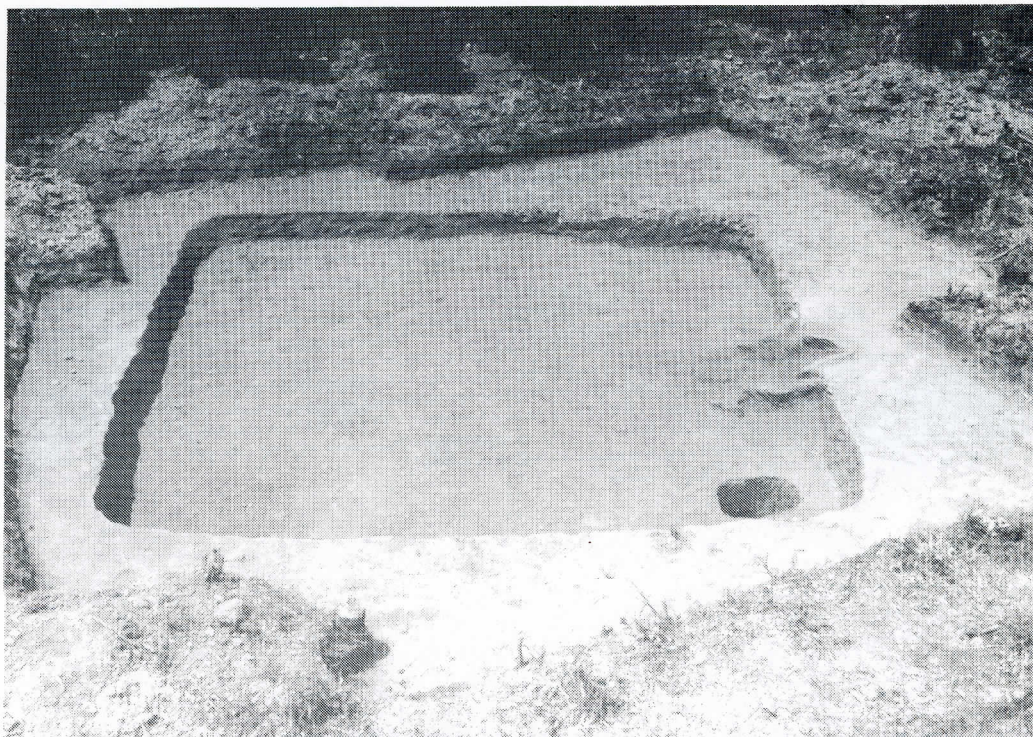


(A) B-4 地点遺構D (西から)



(B) B-5 地点第2号住居跡 (西から)

図版Ⅱ



(A) B-6 地点第3号住居跡(東から)

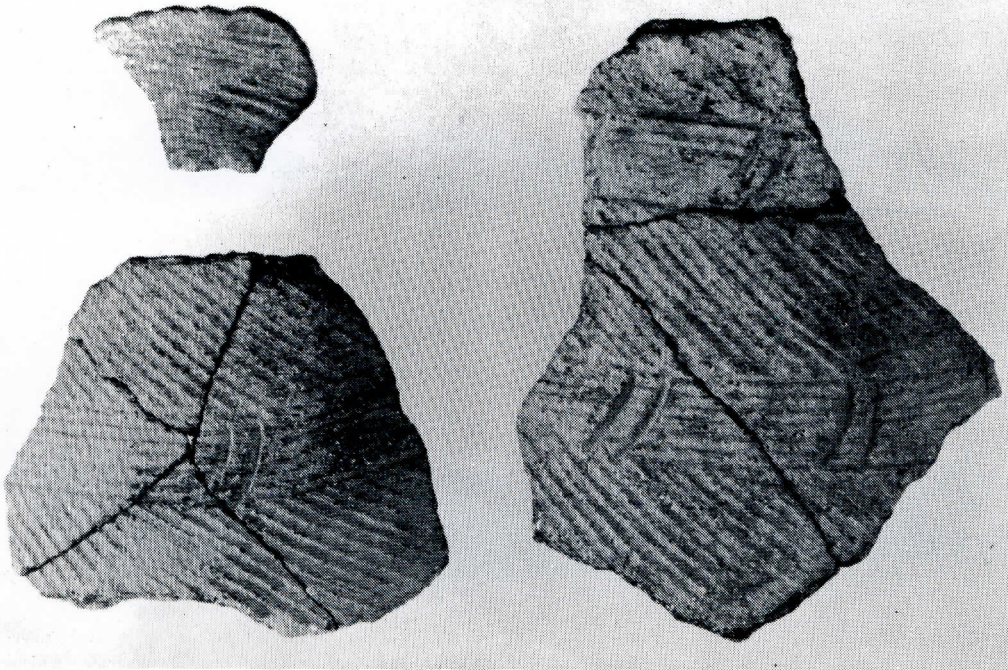


(B) 第3号住居跡かまど(南から)

図版Ⅲ

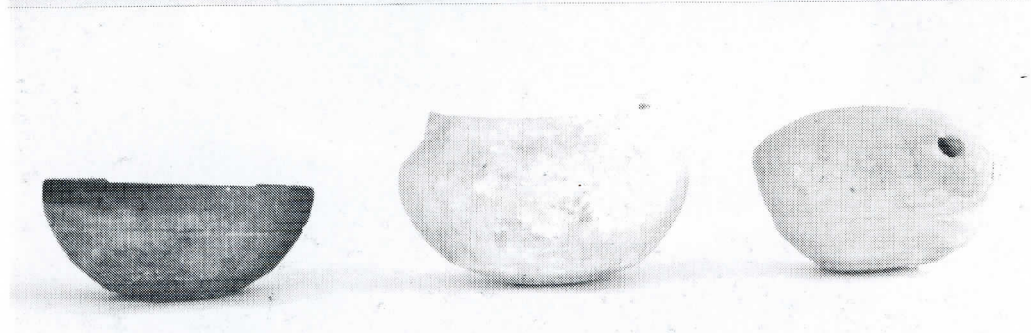
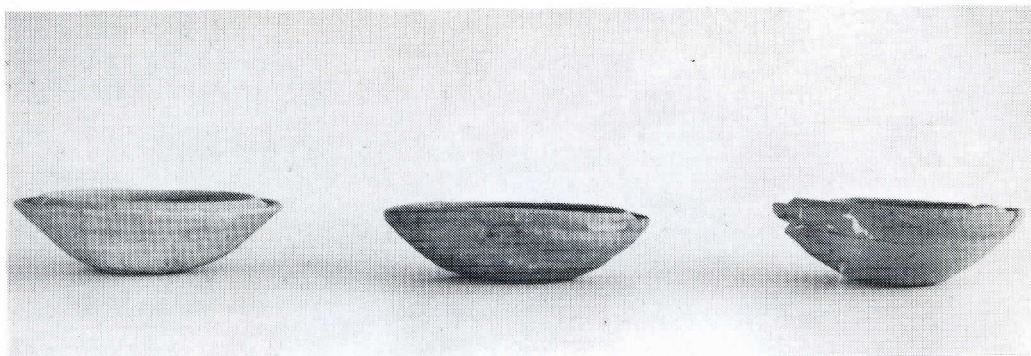


(A) B-6 地点土器木棺出土状態(北から)



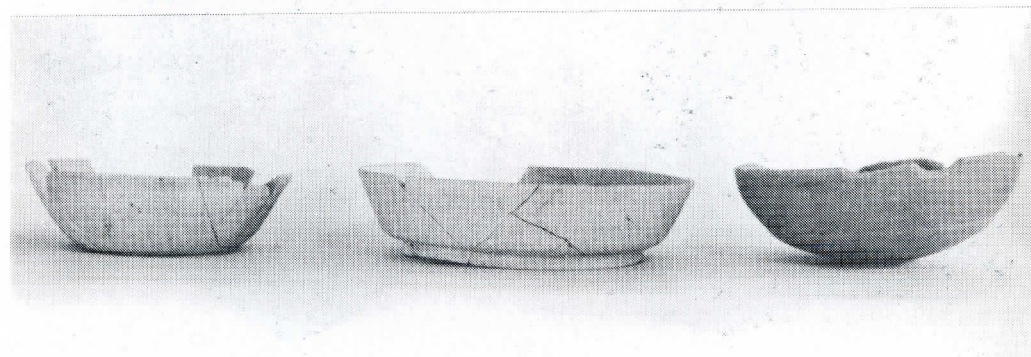
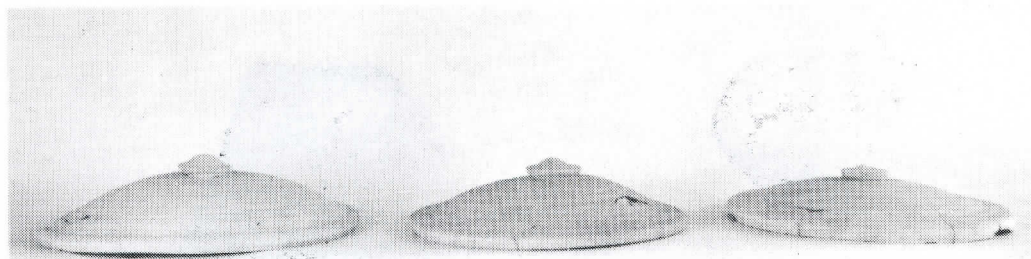
(B) 同上土器棺片

图版IV



(A) 出土須惠器（上段坏蓋・下段坏身、坩、碗）

(A)

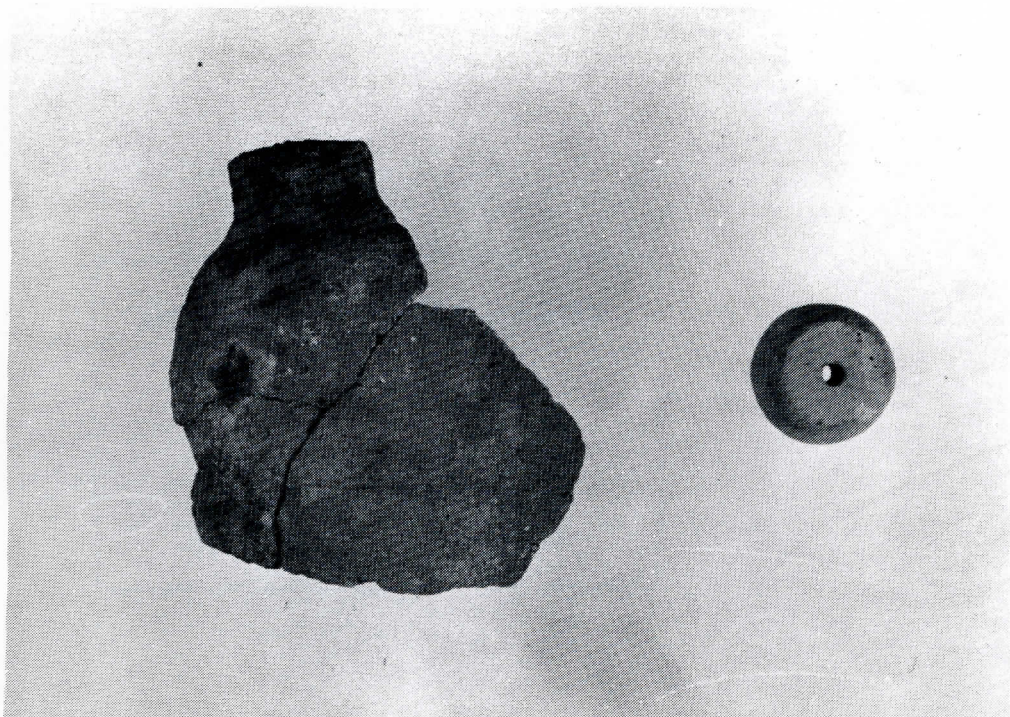


(B) 出土須惠器（上段坏蓋・下段坏身、高坏）

図版V



(A) 出土須恵器（長頸壺、鉢）



(B) 土師器甕・陶製紡錘車

湖西運動公園遺跡群第2次発掘調査概報

1976年12月6日

| | |
|----|-----------|
| 編集 | 湖西市教育委員会 |
| 発行 | 湖西文化研究協議会 |
| 印刷 | カシロ印刷社 |